

エンシュウムヨウラン発見記

杉野孝雄



エンシュウムヨウランの花（右：花の拡大）

エンシュウムヨウランを初めて春野町で発見したのは1980年5月27日である。新種のムヨウラン類と直感した。ムヨウラン類は一般に低地の照葉樹林に生育するのに、標高540mのコナラの二次林にあり、他のムヨウラン類には見られない形に唇弁の毛が分岐していたからである。早速、当時ムヨウラン類について、ご指導をいただいていた、お茶の水大学の津山尚先生に標本をお送りした。先生は6月8日に現地に来られ調査された。

成果を発表するに当たり、筆者は独立種説を主張したが、津山先生はムヨウランの変種説を主張された。理由は他の地域に見られるムヨウランの唇弁の毛にも不規則な分岐があり、研究の余地があるとのことで、「ムヨウランの一変種エンシュウムヨウランを巡る問題」の題目で、課題を残した内容で植物研究雑誌（1982）に発表された。

このことが幸いして、その後、多くの学者がエンシュウムヨウランに着目、研究することになり、ウスキムヨウランの変種、さらに、独立種と流転し、DNAの研究からウスキムヨウランの仲間の独立種と位置づけられ、現在は植物図鑑でも独立種として扱われるようになっている。

分布も本州（関東・東海地方）・四国・九州さらに台湾で発見されている。「ふじのくに地球環境史ミュージアム」の遊歩道でも発見されている。このように広く分布するラン類が、1980年まで誰にも気が付かれなかったことは偶然であり、この発見がムヨウラン類研究の契機になったことは否めないと思っている。

他のムヨウラン類との違いは、地上茎は分岐しない。開花期が5月下旬と早い。花の色は黄褐色と安定していて変異が少ない。唇弁の中裂片の毛は黄色、唇弁の毛には不規則に分岐し細長い枝毛が出る。副萼片の下部、子房の最上部が膨らむ。などである。

和名は原産地が遠州であることに因み、エンシュウムヨウランと津山先生と筆者で命名、学名は *Lecanorchis suginoana* (Tuyama) Seriz. で、種小名に筆者の名がつけられている。



エンシュウムヨウランの蒴果